

# 伝統の技と創造性豊かなデザインで建てる家。 滋賀県産材の活用で林業活性化にも思いを注ぐ。



## 木造建築にこだわり

### 施主の夢を形に

「私たちが守り、生かすもの。それは近江の豊かな暮らしと大工の伝統技術。自らの手で新たに紡ぎだすもの、それは創造性豊かな設計デザインで描く現代の暮らし」。八日市の地に1世紀以上も根差して、施主の夢を形にしてきた株式

会社木屋長工務店の目指す「家づくりの心だ。

「自らの夢が実現するということは、その人にとって人生最大の喜びであると確信している。それが『家を建てる』ということであるならば、私たちの仕事は『夢を形にする』ことのお手伝いだと思う」。老舗工務店の4代目を継ぐ和田孝浩社長は熱く語る。



木の特性を生かした心地よい住まいを提供

で凝らす職人の技が、ひいては「心地よい住まい」に結実している。

施工面で「匠の仕事」にこだわる一方、設計においても高い意識をもって空間と環境をデザインしている。形状、色彩、素材にとどまらず、施主の生活様式やアイデンティティーの具現化までも追求。これらを総合して、デザインすることにより世代を超えて受け継がれる家が生まれ、持続可能な地域の創造にもつながると同社は考えている。このような技の継承と価値の創造」のどちらをも真摯に追求する姿勢が評価され、リーマン・ショック以降、県内の新設住宅着工戸数は消費増税前の駆け込み需要が発生した13年を除いて心理的な節目となる1万戸割れが続くなか、木屋長工務店の施工実績は上昇基調を維持してきた。「手間を惜しまず、良い結果を常に残そうとする努力がお客様に評価され、徐々に口コミで広がり、〝木屋長ファン〟になってくださったのではないか」。和田社長はこう分析する。

## 魅力ある地域資源による

### 「鈴鹿材プロジェクト」

林業の衰退で山が荒れ、保水力低下が災害リスクを招く。滋賀の山林を覆うこの現状を改善したい。そんな思いから、地域材の活用促進にも積極的に動く。  
2010年から取り組む「鈴鹿材プロジェクト」は土山から多賀までの山林資源

## Profile

### 株式会社木屋長工務店

- 本社/東近江市栄町7-1
- 設立/1967年
- 資本金/1,000万円
- 従業員数/25名
- 事業内容/住宅の設計・施工、リフォーム・増改築、古民家再生、店舗・事務所的设计・施工、公共建築物の設計・施工

<http://www.kiyacho.jp/>



代表取締役  
和田 孝浩氏

## Voice

施工後も末永くおつきあいでできる地域密着の工務店だからこそ、お客様様の思いを深く受け止められます。今後は伝統工法で建てられた住まいのリフォーム技術を磨き、地域資産としての建築物の継承にも取り組みます。

を鈴鹿材と名づけて、その保護と活用を広く呼びかけるもの。新聞折込チラシで参加者を募り、伐採や製材の現場にふれてもらいう見学ツアーを主催したり、啓発誌「おうみクノチ」（クノチは神話に登場する木の神）を発行するなど、自社PRの枠を超えたアクションを重ねてきた。

その思いは、県産材利用に熱心な滋賀の住宅建築関連業者が設立した一般社団法人「滋賀でいい暮らし いえづくりの会」（会長は和田社長）でも引き継がれ、山林見学ツアーや間伐材を使った住まいの構造見学会という形で滋賀全域に広がっている。

## 間伐材を有効利用する

### ユニットハウスを海外で推進

間伐材を利用したユニットハウスを設計考案した滋賀県立大学教授から海外展開の話が持ち掛けられた。和田社長はこれをアジア圏等の海外市場へ広めれば、間伐材利用が進む上、日本の木造建築物

「木屋長」の名は材木業がルーツであることを物語る。建築業を始めたのが1903（明治36）年で、31（昭和6）年に近代様式で当時評判になった八日市の宮路病院（国の登録有形文化財に指定）を建てたのを皮切りに、地域社会に数多くの足跡を残す。平成になってからも、土山の森林文化ホールなどのランドマークとなる数々の建築を施工してきた。伊藤忠兵衛旧邸茶室の改修等の実績からは、営々と蓄えてきた「匠の技」がうかがえる。

「地域で名高い建築を手掛けてきた一方で、主軸は常に戸建て住宅において、お施主様のライフスタイルに合った住まいを1軒ずつ丁寧に建ててきたのが当社の1世紀余りの歴史。現在も年に三十数棟の「創造性豊かな家」を手掛けている。木造建築にこだわりを貫くのは、設計の自由度が高く、将来の改築もしやすいうえ、鉄骨造では表現しにくい「木のぬく



熟練の職人による材加工風景

の良さを伝えられると考えた。「ユニットハウスは9cm角の角材と構造用合板を組み合わせ、屋根に張った角材が引張り合って加重を4辺の壁に分散される仕組みで、内部に柱がなくても強度を保つことが可能。材を加工しておけば、建物だけでなく1日の施工で建てられる」。

その構想の実現のため、木屋長工務店と滋賀県立大学教授を中心に、木材建材流通業者や貿易会社等がネットワークを結成。「小売事業者等・ふるさと名物応援事業」の14年度補助金の採択や、新技術の開発や新分野への進出をサポートする

もりがある家」を建てられるからだ」と和田社長は話す。

## 手間を惜しまず、細部にまで行き届く匠の技。増える「木屋長ファン」

木の特性を知り尽くし、木造建築に関する知識と経験豊富な大工を十数名も自社で抱えているのが強みであり大きな特長だろう。全国的に職人不足が叫ばれている昨今、同社は15年以上前から若手大工の育成にも取り組み、各年代にバランスよく職人を擁している。木目、柃目、木表、木裏など細かな木の特長を使い分け、木を生かし手間を惜しまない家づくりをこだわる。格子を組む場合は仕上りの美しさを考え、辺材の白太をなるべく周辺に配し、心材の赤みを中央部に用いる。

「ふさわしい場所にふさわしい木を使う」。施主が気づかない配慮を細部にま



中国昆明に建築したユニットハウス

「ニュービジネスサポート資金」の活用など、国や地元金融機関からの金融面でのバックアップを得て、プロジェクトが進行していった。デモンストレーション用物件を建てる候補地を探し、見つけたのが中国昆明の観光農園。昨年11月に同社の大工が渡航し、海外施工を実現するとともに、ユニットハウスの構造展示会を開催した。

「来訪客の多い場所なのでPR効果を期待できる。セカンドハウスや災害時の仮設住宅用にも有効だと思われるので、他のアジア圏でも普及させてみたい」と滋賀の林業復興にも意欲と情熱を燃やす。